



## 中倉(二)

大原孝四郎は、人生の半分を江戸時代に生きた人物である。幕末には、年寄として倉敷村の運営に関わった。展示している「用状」には、早島村庄屋佐藤秀太郎・孫九郎から、同村義之介弟保次郎を倉敷村向市場万吉養子とすることについて記されている。両村共に「差構」いがないため、正規の人別送り手形（送籍状）の発行を行なうことを了承している。また、「判取帳」も村役人としての孝四郎の姿を示すものであり、前年からの米価高騰を受け、倉敷村内の難渋人に対し、1人4升（1日4合）の白米代金への助成金を、509軒1,480人へ配付したものである。

「節斎遺稿」は、幕末に活躍した儒者森田節斎の弟子達により編纂された書籍である。節斎に師事した壯平は、自宅を「謙受堂」と名付け、節斎は孝四郎のために「謙受説」を執筆している。展示している部分には、壯平が自宅を「謙受堂」と名付けた謂われを漢文で記した「謙受堂記」が記されている。



倉敷紡績所・倉敷銀行定款

明治22（1889）年8月に更正された、有限責任倉敷紡績所（現在の倉敷紡績株式会社）の設立願と定款である。主な変更点としては、創業時錘数を10,000錘から5,000錘とすること、資本金を20万円・2,000株から25万円・5,000株として3期に分けて募集することなどが記されている。

倉敷紡績所設立後、明治24（1891）年には、倉敷銀行が設立された。これは、設立間もない時期の倉敷銀行定款である。資本金6万円、株数1,200株、1株50円とすることや営業・役員・総会などについて規定されている。

また、大原孝四郎宛の木山精一・林醇平の書簡には、それぞれ、倉敷紡績と倉敷銀行の経営に関する報告事項が記されている。

大原家のもう一つの側面として、岡山県下を代表する大地主であった点も重要な要素である。「田畠小作取立帳」は、膨大に残る小作関係書類の一つである。

「窪屋郡丸持鏡」では、横綱に位置していることからも財力の一端が伺える。



## 内中倉

大原家に残る数多の書籍の内には、和綴本も多数含まれている。これらの書籍は、文人肌と言われる孝四郎により収集されたものが多いと思われる。『大日本史』は、徳川光圀が編纂を命じた歴史書である。完全な形での完成は、明治39（1906）年であり、実際に二百数十年かけて完成した書物である。展示しているものは、幕末に刊行されたものであり、「大日本史」と箱書きされた専用の木箱に収められた全243巻100冊の大著である。尚、木箱には「安政七年」の年紀が記されており、刊行後、10年ほど経過して購入された模様である。

『春秋左氏伝校本』は、孔子が記したとも言われる歴史書『春秋』の注釈書『春秋左氏伝』に、尾張の秦鼎（1761～1831年）が校訂を加えたものである。倉敷紡績初代社長大原孝四郎が制定し、現在でもクラボウの社是である「同心戮力」の典拠となっている。その意味は、「目的達成のために、心を一つにして力を合わせて協力していこう」である。

大原孝四郎は歌人の要素をもっており、「子容」や「宣之」名で俳句や短歌を認めた多くの短冊が残されている。

としよれと うれし今としも 豆名月 子容  
きかてこそ ほとゝきすなれ 杜宇 子容

季語は、それぞれ「豆名月」（旧暦9月13日夜の月）と「ホトトギス」（夏5月）である。

はつ孫の 生れしきゝて 暑き日も あつさわするゝ 我かおもひかな 宣之  
わすれぬは 我ちゝ君の 御蔭にて 日毎ぐ(繰り返し)の 酒の味かな 宣之



正阿弥勝義（1832～1908）は、岡山県津山出身の金工家である。

正阿弥勝義と大原孝四郎は、遅くとも明治20年代半ばから交流が見られ、非常に多くの作品を購入していることが大原家文書より確認できる。また、『山陽新報』によると、明治32（1899）年には、野崎武吉郎の貴族院議員再選を祝して、正阿弥勝義彫製の花瓶が贈呈された。この花瓶を発注したのは、大原孝四郎であった。孝四郎からの発注は、勝義死没まで継続されている。

左の写真「丹頂居鶴香炉」は、大原家に残る史料によると、明治30（1897）年に「銀製丹頂鶴香炉」の代金として、250円が支払われていることが分かる。尚、「居鶴」とは、座っている鶴という意味である。

「菊皿」については、裏面に記された文言より、大原新溪翁（大原孝四郎のこと）古稀祝いとして、71才の正阿弥勝義が鋤したものであることが分かる。



正阿弥勝義作《丹頂居鶴香炉》